

第一話「ご生誕く父の遺言」

(シーン1)

「怨親平等」・敵も味方も平等の心で接する・この崇高な精神、教えに誰も異論を挟む事はないでしょう。しかし実際問題となると、果たしてどれだけの人が実行できるでしょうか？ 例えば、もしも自分の身内が他人に殺されたならば、相手を怨まずにはいられません。どんなに立派な教えがあっても、それを実行できないならば、絵に描いた餅と同じです。

しかし長い日本の歴史の中で、その精神を身をもって示されたお方こそ、私たちの宗祖、法然上人なのです。

(シーン2)

「南無阿弥陀仏」のお念仏をお称えする事で、万人に心の救済を与えた法然上人。お生まれは、長承二年、平安時代の末期、まさにこれから源平の戦いが始まろうとする動乱の世の中でした。故郷は美作の国、今の岡山県久米郡です。稲岡の庄という所に、漆間うるまのとき時国という名の侍がおりました。押領使という役職で、暴徒の鎮圧や、盗賊の逮捕など、いわばその地域を取り締まる警察署長のような仕事です。その妻は地方の豪族、秦氏の娘。二人はとても信仰ぶかい夫婦であり、なかなか授からない子どもの祈願のために、屋敷より六キロ離れている、岩間の観音さまに二週間お籠りをしたと言われています。

そして秦氏さまは、「剃刀を飲む」という不思議な夢をご覧になりました直後、ご懐妊なさいます。昔の方は神仏に祈りを捧げると、その後に見た夢を非常に大切にいたしました。剃刀とは「おかみそり」の事。すなわち「人々に戒を授ける」方がお腹に入られたという暗示でありましょう。

(シーン3)

いよいよ四月七日の正午に可愛い男の赤ちゃんが生まれました。その時、めでたい証である紫雲が、お屋敷の上にたなびき、大きな椋の木には、どこからともなく白幡がふた流れ飛んできて、梢にかかったと伝わります。

時国夫妻は大いに喜び、聡明な子に育ててほしいと、勢至菩薩さまにあやかつて、勢至丸と名付けました。この勢至丸こそ後の法然上人、その人です。すくすくと成長されて早、九歳とられました。

(シーン4)

さて、この稲岡の庄という所には、平安時代から始まった庄園制度において、京の都にいる領主の代行をする預^{あずかりどころ}所という役人がおりました。その役をしていたのが明石定明^{あかしのさだあきら}です。時国の役職、押領使はもつと古くからの役ですから、お互い対立いたします。定明にしてみれば、自分に挨拶にも来ない時国がなまいきで仕方ありません。その思いが高まり、いよいよ我慢が出来なくなり、手勢を引きつれて時国の屋敷に夜討ちをしかけました。

(シーン5)

「時国、覚悟！」

「ううっ！ 定明か」

この様子を勢至丸も黙って見てはいられません。小さな弓を取り出して「ひゅっ」と放つと、定明の眉間に刺さりました。

「ええい、もう良い、みんな引き上げろ！」

定明は馬に乗ってひきあげました。

(シーン6)

時国は深手を負いました。いまわの際に勢至丸を呼びよせます。

「お前はこのたびの事を武士の恥と思い、敵を恨んではならない。このことで仇かたきを討てば、敵もまたそれを恨みに思い、恨みは尽きることがないだろう。それより世俗を捨てて僧となり、私の菩提をとむらってくれ。そしてお前も、自分の迷いを断ち切るのだ」

時国は合掌し眠るように亡くなりました。その後、主を失った漆間家には家来もいなくなり、秦氏は自分の弟が住持する山寺に、泣く泣くわが子を預ける事にいたします。そしてその四年後、勢至丸は、比叡山に登ることになるのですが、そうなるともう、二度と会うこともかありません。夫を失い、たった一人の心の支え、わが子とも離ればなれになる、秦氏の心境はいかなるものであったでしょうか。

(シーン7)

そして、その日から法然上人の求道の日々が始まるのです。それまで豪族の御曹司おんぞうしとして何不自由なく暮らしていた、わずか九歳の子が、一夜にして父を殺され、家を焼かれ、母との別離と、まさに諸行無常の現実に向面したのです。そして耳に残った「敵を恨むな」という父の遺言。これは当時の武家社会において、自らを奮い立たせようとする、その生き甲斐を無くしてしまいそうな言葉に思えます。しかし九歳の法然上人の目に焼き付いたこの原風景こそが、そののち三十年以上にわたり教えを追い求めた、強烈な求道エネルギーの源泉となったのです。

(シーン8)

「どうしたら全ての人たちが、敵も味方もなく平等になれるだろうか？ 戦い、憎しみの尽きないこの世の中で、どうしたら家族を殺された者たちが、心の平安を取り戻せるのだろうか？」

毎日、飽くことなく沢山のお経本に向き合って、やっと出された究極の結論は・・・。

「阿弥陀さまにお念仏をお称えすれば、西方の極楽浄土に往生がかなう。阿弥陀さまのお迎えをいただいて、誰もが平等の世界に行ければ、そこで懐かしい人たちと再会できる。そして、私の歩んできた人生の道理を、極楽で見直すことができれば、この世界での怨みも捨てられるだろう。この世界で縁のあった私の敵さえも極楽に導いてあげようじゃないか」。

これこそ「敵を恨むな」という父の遺言に対する、法然上人の出されたお答えでありました。

(シーン9)

「父の仇」という怨みを捨て去り、現実世界に苦しむ多く人々の心を救済した法然上人こそ「怨親平等」という究極の理想を、御一生かけて私たちに示し下さった聖人なのであります。

私たちは、この現実社会を生きている限り、「怨親平等」の理想にかなわない事もありましょう。しかしお念仏を称えるうちに、せめて「怨親平等」を体現された法然上人のお徳に、少しでも与りたいと願います。どうぞお念仏をお称え下さい。 同称十念